

〈第29回学会大会 講演録〉

メディアとスポーツ、今までとこれから
選手の側からみたスポーツ映像の意味

沢松 奈生子

The Present Situation of Media-Sports reviewed from my Athletic Career

Naoko SAWAMATSU

みなさん、こんにちは。「メディアとスポーツ」ということで、お話をしてみたいと思うんですけども、プロ選手にとりまして、といいますかスポーツ選手にとりまして、このメディアというのはもう切っても切れない仲にあるわけですね。私自身、引退するまでは実際にやはり多くのファンの方とか、こうして皆さんとお目にかかる機会もほとんどなくて、ですから逆に皆さん側からはテレビの映像、新聞、こういったものを見てある程度「沢松奈生子ってこんな人じゃないか」ということを想像されていたと思います。私自身それがすごくやさしかったといいますか、なんとなく残念であったのが、例えば言っていないことが書かれてしまったりとか、それから本当はもうちょっとスマートなのになんでこんなにテレビだと太って見えるのかなとか（笑）、我ながら自分の映像を自分で見て「こりゃないな」と思ったことも何回もありました。その他にもいろいろ今日は詳しいお話をしていきたいんですけども、とにかく選手にとってメディアというのがまったく切っても切れないものにあるということをもっと頭の中に入れておいて頂いて聞いて頂きたいと思います。

● ランキングシステムの負担は大きくなっている

まず、プロテニスプレーヤーの日常生活なんですけども、

1年間の約52週の中でほとんどどこに行っても大会は行われています。もっと言いますとダブルで行われている週もありますので、年間約65大会程度行われています。この大会の中から自分の体調、それから相性のいい組み合わせや、気候とかありますので、こういったことを考慮しながら大会を自分で選んでいくわけですけども、その中でも特に俗に4大大会と言われている全豪オープン・全仏・ウィンブルドン・全米オープンと、こういったものを目指して試合に参加していくわけです。当然大会数が少なければグランドスラムの大会に出られません。大会数それから自分の勝ち上がったポイントなどを計算して、世界ランキングというのが付けられていますから、そういったランキングというのを常に意識しながら大会をこなしていくわけです。

だいたい今年の99年で考えますと、世界ランキング100位以内の選手の年間平均の大会数が23でした。私が大学生の頃、何年前とは言いませんが数年前ですね。5年位前かな（笑）。これぐらいの時は、だいたい12とか15だったんですね。それが現在世界のテニスのレベルも上がっていますし、ランキングシステムも若干変わったこともあるんですけども、年間23試合になっているということで、選手の身体にかかる負担というののもかなり大きくなっています。それと共に当然大会

が増える訳ですから「緊張感を保つこと」それから「息抜きをすること」この波がととも激しくなりますので、なかなか選手の気持ちの中で余裕というのも出てきません。気持ちに余裕がなくなると、当然マスコミに対する態度もちよっと冷たくなると言いますが、なかなか対応しきれない部分もあると思うんですけども、その背景にやはりランキングシステムということが多分にあるというふうに私は感じています。

● エージェントに教育された事

ただこういった状況の中でプロ選手、特に皆さんご存知のヒングスだとかグラフだとかそういう世界のトップの選手というのは、非常にうまくマスコミとコミュニケーションを取っています。この原因の一つに、今よく言われている代理人、エージェントがあるわけです。私自身も、アメリカ人のエージェントにお願いして、ある程度契約の話だとか、大会のスケジュール、コーチとの契約のお話、こういったものはやって頂いたんですけども、それ以外にエージェントに教育をされた事というのが、マスコミに対する態度なんですね。当然マスコミに対してにこやかにしろとかそういうことはもうわかりきっていることなので、あまり本人が無理ににこやかにする必要がないのでそこまで詳しく言わないんですが、例えば試合の後にインタビューがあります。この質問を聞かれた時はこう答えなさい。例えば負けた時に「どうでしたか」と言われた時も、自分は「今日のはあそこが悪かった、ここが悪かった」と言う前にまず相手の出来を褒めなさいと。とにかくインタビューを聞いていても、ヒングスが決勝戦で負けたとしても必ず今日の、例えばビーナス・ウィリアムスの出来は良かったというふうに一言褒めることを絶対忘れないんです。これは決してマスコミのウケを狙ったわけではないと思うんですけども、一つの作戦であることは事実なんです。こういった細かいことから、優勝スピーチまで、優勝しますと必ずカップを貰ってスピーチをするわけですけども、そのスピーチの内容まで詳しく教えられました。私が優勝した時は、まず最初に大会のスポンサーですね。プロ大会ですので当然スポンサーがついています。そのスポンサーの企業名を1から10まで覚えろと。覚えてこれを全部言っておりがとうございましたと。そこから始まって、更に今日来て頂いたお客様に有り難うございました。それからお世話になったコーチ、両親、自分の身内にお

礼を言って、また来年もこの素晴らしい大会を開催してもらえることを望んでいますと。私もまた来年も戻って来たいと。また頑張りますということで閉めてくださいと。本当にそういう教科書みたいなものが、ある程度出来上がっています。ですからどこの大会に行っても、選手の優勝スピーチというのはもうほとんど変わり映えがしません。たまにマイケル・チャンというアメリカの選手が全仏で優勝した時に、彼はかなり熱心なクリスチャンなんですけども「今日優勝出来たのは神のおかげだ」と言って、かなりユニークと言いますか変わった優勝スピーチをしたこともありましたが、今年のグラフが全仏オープンで優勝した時も「私は今日はフランス人の応援をこんなに受けて、フランス人じゃないかと錯覚した」というくらい彼女のスピーチもなかなか感動的でした。ですから聞いていますと「ああ、これは教科書通り言っているな」と思う選手もいますし、しかしその中でも言うことは言わなきゃいけない。でもしっかり自分のオリジナリティを持ってスピーチができる選手も中にはいたと思います。そういった教育というのは代理人・エージェントがある程度しているわけですけども、特に十代の若い選手にはこういったことは教育ができています。この背景には、やはりとにかくいいイメージでたくさん取り上げてもらいたいということで、その選手の価値を上げていこうという意味でマスコミをうまく使っている部分がものすごくあるのではないのでしょうか。

他の選手を見ていましたら、マスコミを敵に回さずにうまく自分のテニスに集中できてるなというふうには私は見てたんですけども、内心実際私がプロでやっている時は、とてとてそんな余裕はありませんでした。選手にとってやはりマスコミというのは、なかなかうまく対応しなきゃいけないと思いつつも、正直言うと少し煙たい存在であることは間違いなと思います。

● 選手からみたマスコミのタブー

では少し記者会見とかインタビューで感じた、選手から見たマスコミのタブーと言いますかこういったことは困ったなと思ったことを少しお話ししていきたいと思えます。試合当日に選手がマスコミと触れる時というのはあまり無いんです。試合前の練習時間、ここで少しでも声をかけられれば（マスコミにとっては）儲けものなんですけども、なかなか選手というのはピリピリしていますから「今日の調子どうですか」とか

「今日対戦相手には勝つ見込みありますか」とか、そういったこともなかなか聞きづらいところがあると思います。そして試合中に記者の方は試合を観戦されて、その後のポストマッチインタビューがあります。これはプロ選手は必ずやらなきゃいけないことなんですけども、試合が終わったらシャワーをして、その後記者会見に必ず行かなきゃいけないんです。勝っても負けてもこの記者会見というのは義務付けられていますので、そこである程度決まった時間記者の方の質問に答えなきゃいけないので、マスコミからするとインタビューしやすい絶好の場所だと思います。ただですね、この中で困った質問として、私自身が今まで経験した中でこういう記者は本当に困るなと思った例があります。ポストマッチインタビューだけではなくて、実際に選手にテレビのインタビューとかで5分10分とお話を聞く場合があります。私自身もやはり現役の時は、試合と試合の時間の合間を縫ってインタビューを受けたりしたんですけども、要するに緊張感で一杯なわけですね。こちらは試合も控えていますので、そんなに長い時間はいられない。例えば練習の後、シャツを着替える間もなく、インタビューを受けることがあります。ただそういう限られた時間しかないインタビューにもかかわらず、中には必要最低限のデータを調べて来ないでインタビューに来られた方もおられました。例えば一番ひどかったのは、試合が控えている練習の後のインタビューで、「沢松さんはお誕生日はいつですか」とか。「そんなことは調べて来い」と、このへんまで出かかったんですけども、私もキャラ的な問題がありますので（笑）それは言えなくて「3月です」ってこのへんピクピクしながら答えました。更に「お母様とかもテニスをなさってたって伺ったんですけど、どのくらい強かったんですか」とか。「もう、調べて来い」と。本当に声を大にして言いたくなることも多々ありました。当然そういうインタビューをされる時というのは、私もカチンときてますからあんまりいい答えは出ませんよね。どんなにいい質問をされても「この人に答える必要はないわ」と思うってしまうわけです。人間ですから。またこうしたこと、それからポストマッチインタビューという義務を果たしているにもかかわらず、その後に直接自宅とかホテルとかに電話をかけて来る人もいますね。こういったこともやはり、ある意味選手に対するマスコミのルール違反だと思います。ある程度私達も、当然選手の務め

としてインタビューはこなします。そのかわりテニスプレーヤーであるということはあくまでも試合会場までであって、そこから出た場合に私達もマスコミの人の中にも知り合いもお友達もいます。その人達を見る目もテニスコートを出れば、お友達だと思っています。ただし、試合会場に入ればあくまでも選手とマスコミの関係なんですね。この辺のルールがしっかりと理解できてない人が中にはいらっちゃって、非常に苦労したこともありました。

引退を決意した時に引退発表を、9月の25日だったと思いますが、しょうという事で内々で話が決まっていました。そうしましたら9月23日頃からマスコミ各社の間で「沢松が引退するんじゃないか」という情報が回り始めたみたいで、私の実家やそれから母校、お友達の家、所かまわずお電話をかけて来たみたいです。本当にあつかましい某通信社の方がいらっちゃいまして、その方は私の東京のマンションに電話して来まして、当然お名前は知ってましたから「どこのなになにです」というふうに言われて「こんにちは」とご挨拶をしました。次の瞬間に出てきた言葉というのが「沢松さんおめでとございます」と言われたんですね。「おめでとございますってなんだろうなあ」って。「いや、何でしょうか」って言ったら「ご結婚決められたんじゃないんですか」って言われたんですね。確かにこれはうまい手だなと思いました。もし私が引退するという事で、引退イコール結婚という方向で決まっていればひょっとしたらそこで「おめでとございます」といきなり言われたら、「あ、どうも」って言ったかもしれないですね。もし私がそうやって「どうも」と言っていれば、次の日に新聞には間違いなく“沢松結婚”と出てたと思います。そういうネタもなかったで引掛からず済んだんですけども、とにかくあの手この手で誘導尋問、それからいろんな方法でマスコミの方というのは、タブーを破って選手の方に取材に来てしまうというのが今の傾向だと思いました。

●インタビューでの日本的な空気

それから、ポストマッチインタビューの中でちょっと私が個人的に嫌だなと思った雰囲気、非常に日本的な空気なんですけどもインタビュー会場にこうして入って来て、こう壇上に立っているわけです。記者の方が皆さんのように座っておられて、質問を聞いて

こられるわけですけども、勝った時は私もそれは明るいですね。「やあ、皆さんこんにちは。お待たせしました」とにこやかなんですけども、当然記者の方の質問も明るいんです。負けた時は、私は関西人で暗いのが嫌いなので、一応明るさをもって会場に入って来るんですけども、誰一人として私と目を合わそうとしないんです。皆、なんか目を合わせちゃいけないんじゃないかとか、質問をしちゃいけないんじゃないかとか、そういう暗いお葬式のような雰囲気、インタビュー会場が本当に湿っぽくなってしまっています。これは勝手な個人的な意見なんですけども、そういう暗い空気もなるべくやめて頂きたいと思いますし、それプラス必ず日本人の年功序列というのがあるみたいで、インタビューをされる方。例えば記者の方が2、30人おられたとしても、多分座る場所も決まってるんでしょうし、聞かれる質問の順番、第一声というのが必ず誰かが質問しないとその他の記者は質問をしちゃいけないというような暗黙の了解があるみたいで、その誰かがいらっしやらない場合いつまでたっても始まらないんですね。ポストマッチインタビューは5分~10分ってほしい決まっていますので、その時間で帰りたいんですけども、5分待っても10分待っても質問が来ないということがあって、これは非常にもったいないなと感じました。選手の側から見ても非常にもったいない時間というのも中にはあるという事です。

更に、私の今まで聞かれた質問の中で最も多かった質問が「沢松さんはテニス一家に生まれてプレッシャーというのは無かったですか」という質問ですね。これが何千回聞かれたかわかりません。本当によく聞かれました。これに対してはプレッシャーは本当に無かったので、あまり苦にならない質問なんです。逆に今まで聞かれた質問で一番嫌な質問、もうこいつだけは許さないというふうに思った質問はですね、確かにあまり勝てなくてちょっと負けが込んでたんですけども、しょうがないから、記者会見場に行くわけです。行って何聞かれるのかなと思っていましたら、いきなり飛んで来た質問が「沢松さん、最近勝ってないですね」と言われたんですね。「勝ってないですね」と聞かれても、選手は何て答えればいいんでしょうか。「そうですね」というのもくやしいですし、かといってその方が何を狙ってたのかわからないんですけども、私が怒っている顔を見せて欲しかったのか、はたまた逆に怒らせるような質問をしてその選手の感情をうまく出

したいという記者の方もいるので、そういった作戦もあるのかもしれないんですけども、それからその後引退するまでその記者の方に聞かれた質問というのは、私は何を聞かれても「はい」「いいえ」と一言だけで答えるという非常に意地悪な選手でもありました。そういった事は滅多にはやらないんですけども、本当に怒った時はそういう選手もいますよということ覚えておいてくれればというふうに思います。

●選手の内面が本当にわかっているのか

更にポストマッチインタビューの時に、だいたいポストマッチですから試合内容について聞かれる事が多いわけですね。当然私は試合をしている時に、例えば「あ、今日はあそこのテニスマガジンの人が来ている。共同通信の人は来ていないな」とか、「読売の人は来ていないな」とか、だいたい顔はわかっているんで、当然どこの会社の方が来られて、どこの会社の方が来られてないというのは頭の中に入っているわけです。それにもかかわらず、いかにも「僕は試合を見ました」と言わんばかりの質問で、いなかったというのは私はもうわかっているわけなんですけども、ある新聞社の方が「いやー沢松さん、第一セット第何ゲームのあそこのサービスおしかったですね」と言われたんですね。もうどうしようかと思いました。当然見てないくせに何でそれがわかるんであろうかと。マスコミの方同志のコミュニケーションで、そのポイントが大きかったということは聞かれたと思うんですけども、選手にもわかるような見え透いたことというのはなるべくやめた方がいいんじゃないかなと。私は個人的にちょっと気分を害してしまいましたし、確かにポイントは大きかったんですけども、あまり選手の競技について、私であればテニスについて突っ込んだお話をしてしまうと、これもカチンとくるプロの選手は多いみたいです。よくロッカールームで「今日どんな質問聞かれた」とか「あの記者またこんなこと言ったでしょ」とかお互いに話をするんですけども、たいい嫌な質問をする方というのはもう決まってるんですね。なおかつそういう人というのは、いかにも「僕はテニスのことをよく知っています」と言わんばかりに詳しく聞いてくるわけです。やはりプロということで、私達これを仕事として相当厳しい環境の中で意識もしっかりと持ってなきゃいけないですし、プロ意識と言いますと本当に難しいことになるんですけども、そういった意識を

持ってやっている選手の内面が本当にわかって聞かれているのか。それともわかったつもりになって聞いているのか。そういった事は話していればすぐわかってしまうので、やはり質問をする時はなるべく知ったかぶりと言いますか、僕は知っていますという態度をとらないで、「ある程度最低限の勉強はしましたけれども、さすがにプロのこととなるとあまりよくわからないんで」というふうに素直に言って頂いた方が、気分的には私はお答えがしやすかったです。

今いろいろと私辛口で述べてしまいましたけれども、別に記者の方が憎くて言っている訳ではありません。ただ、当然お世話になった部分もありますけども、また逆にこうした今まで困った部分も沢山あったわけです。わかって頂きたいのは、とにかく記者の方というのは質問をして“何とかスクープを取りたい”“自分にしか答えてない内容のものがほしい”こういった意識はよくわかるんですけども、やはりお互いに歩み寄って記者の方もなるべく選手のやっている条件、それから気持ちというのをうまくくんで頂けるとより選手も答えやすいんじゃないかなというふうに感じました。

●人間としての大きさとランキングは比例する

ではここで少しマスコミから話をそらせまして、先程プロ意識というお話をしましたけれども、ちょっと選手の個人々々のお話をしていきたいと思います。どういう選手が強いのか、トップの方にくるのか。これはテニスの世界の場合は簡単でした。例えばトップに行く選手、世界ランキング1位2位と言われている選手からテニスを抜いたとしても、限りなく大きなものが残っています。この人は素晴らしいと思う人がほとんどでした。逆に何かの勢いで間違ってトップ10に入ってしまった、でも端から見ていると何でこんな人がこんなに回りのことも全く考える事ができない、自分の事しか考えてないような選手が何でトップに行けるんだろうと思った時は、たいていその選手はすぐに落ちて行きます。ということで、非常にその人間としての大きさとテニス選手としてのランキングというのは比例してたんですね。

その中で感じたことの一つにプロ意識というのがありますが、俗に例えばオリンピックに行った場合、オリンピック競技の中でテニスが唯一プロ競技だった当時、当然プロ意識を要求されるわけです。残念ながら柔道ですとかそれから陸上、レスリングだとか。

本当にたくさんメダルを取ってる競技ありますよね。こういった競技の選手の方が、意識の点では本当にプロだなということを感じました。私達は選手村に入りますと、テニスの場合だいたい3LDKのお部屋に6人なんですね。ですから単純計算しても、1部屋に2人の割合で入ってるわけです。ツインのお部屋ですから特に文句を言うことは無いんですけども、それでもテニスの場合は普段からホテル生活をしているので、海外遠征の中では1人部屋じゃなきゃ嫌だという声はほとんどだったんです。

ただ次の日に、田村亮子選手のお部屋に遊びに行きまして、皆どういう所で暮らしているのかなと思って行きましたらなんとですね、1部屋に8人で生活していました。これは各競技人数によってたまたまそうならしいんですけども、その1部屋8人、2段ベッドが4つだったんですね。仮にもオリンピック選手ですよ。オリンピック選手が選手村で2段ベッドで寝ていることにびっくりしたんですね。これでよく競技ができるなど。でも次の瞬間に思った事は、これでも彼女たちは自分の状態を100%ベストにしてその競技に望むことができているわけです。テニスとは言いますと「1人1部屋じゃなきゃ嫌だ」とブーブー言うことだけは1人前で、メダルも取れない。本当に言うことだけはプロであったなど、改めて他の競技の選手を見て感心させられた部分がありました。

今お話した通り、やっぱり“身分はプロ”という選手は沢山いるんですけども、本当に中身までプロ意識をしっかりと持っている選手というのは、なかなかないと思います。

プロ野球選手の中でも、私も何人かの方とお食事に行った事があるんですけども、私はお酒が飲めないのでも早々に帰ります。そうしたら次の日にお話を聞いたら、朝4時から5時までそのまま飲んでいて球場に行つて、それで試合をする。それが果してベストなんだろうかと。仮にもお客さんはお金を払ってチケットを買って、その試合を見に来られるわけです。アマチュアであれば「僕今日、体調が良くなかったので負けました」。これが通用するかもしれませんけども、プロの場合はもう絶対に通用しないんですね。絶対にプロというのはどんな状況であっても、自分の試合に関してはベストの状態に持っていけるように努力すること。これは必要最低限の事だと思います。こういった事が実際にプロでもできてない人が多くて、逆にアマチュアの方

でもできてる方はすごくおられました。ということで、プロ意識の違いというのは感じたんですけども、その意識もやはり世界のトップになりますともっともっと凄いものがありました。

📌 世界トップ選手たちのプロ意識

テニスのツアーというのは、だいたい同じメンバーで対戦していますので、ほとんどが皆顔見知りです。ですけども当然その中でもウマが合う合わないはありますのでそれは実際にお話したりしてみないとわからないんですけども、だいたい練習相手というのもこれほとんど皆さんの学校生活と同じだと思いますけども、自分の仲のいいグループでだいたい固まってしまうんですね。それで中には「絶対あの子とは練習したくないわ」という選手もいましたし、特にどういう選手かといいますと、フランス人の選手でしてね。私も「この人だけは練習したくない」と思った人が1人だけいるんですけども、全く相手のことを考えない練習をします。コートに入って来て自分だけ自分の好きな練習をして、それで時間が来るまで自分のことだけをやって、例えばボレーをする。スマッシュをする。サービスをする。全てのショットを確認して、それでサッサと帰って行くんです。ありがたうも言わないで。こういった選手も中にはおりました。当然トップの方には行けません。彼女の場合は、他の選手にもなかなか練習相手にはなってもらえないで、結局コーチとよくやっている場合があったんですけども、テニスの世界は面白いもので、ランキングで全てその選手の身分というものが決まってしまうので、私が例えば20番であった場合、トップ10の選手に声を掛けるということは難しいんですね。ほとんどこれタブーなんです。自分からトップ10の選手に「練習しましょう」というふうに声を掛けるのは、かなり思い切ったことなんです。だいたいだから自分と同じ位のランキングで、練習を普段行うわけですけども、トップになればなる程、「この子は伸びて来るな」と思った若手の選手には自分から声を掛けて、その子を伸ばしてあげようということをよくやっています。今年のウィンブルドンでもグラフがよくドキッチというオーストラリアの選手に声を掛けて、2人で練習している姿を見ました。普段でしたら試合中ですから、自分よりも年下の、要するにランキングが全くかけ離れてる選手とは練習したがいらないんですね。あまり自分の身にはならないので。です

けどもそういう中でもやはりトップの選手の方が、どんだんそういった今後のことも考えて行動することができているというふうに感じました。

それから海外の選手を見ていて、特に私がツアーを回っていて一番学んだことといいますが、よく最近日本でも国際化とか国際人とかいった言葉がよく聞かれるんですけども、私は15才でツアーに回りはじめましたけども、その時は国際人というのはイコール英語が話せるだとか、テーブルマナーができるだとか、それからかっこよくレディーファーストとかそういうことがスマートにできるとか、そういった外見のことだけを考えて、国際人であるというふうに解釈をしていました。ただこれは海外の選手と照らし合わせて見ると、特に欧米の選手、たとえばドイツ人の選手が日本の大会に遊びに来た時に、彼女に「日本という国はもともとどこにくっついてたんだ」とか「大陸はどこにあったんだ」とか「神道と仏教の違いは何だ」とか「天皇家というのはさかのぼったらどこまでいくんだ」とか、とにかくいろんな事を聞かれました。それも歴史上の事ばかりです。私は一応歴史好きだというふうに分で自負していましたので、こういう質問はもうまかせろというふうに思っていたんですけども、残念ながら全部答えることができなかったんですね。なんとなく答えることはできます。ただその子を納得させられるだけのことは言えなかったんです。なんで私、こんなに日本のこと知らないんだらうかというふうにその時思いました。逆にドイツに試合に行った時に、ドイツ人の選手に全部聞かれた事をそっくりそのまま返しましたね。「ドイツという国はどうなってるんだ」とか。とにかく歴史のことを全部聞いたわけです。そうしましたら、ほとんどの選手が全て自分の国のことは答えられます。答えて当然だという顔をしてるんですね。自分がドイツ人である、それからフランス人である。そういったことにものすごく誇りを持っていましたし、私とは逆に私は日本語を話していることを恥ずかしいと思ったんですね。英語が話せなきゃ恥ずかしいと思ったんです。じゃなくて「英語が話せなくて何が悪いの」というくらい気持ちなんですね。本当に「国際人というのは何なんだろう」といろいろ考えていきましたら、私なりに行き当たったところが、やっぱりまず自分の国の事をよく勉強して知っていること。それでなおかつ、自分の国に誇りを持てること。私であれば、やはり日本のことをよく

知っていて、日本人であるということにまず誇りを持たないとそこから何も始まらないなど。いくら海外のいろんな国に試合で行っても、なかなか受け入れられてもらえないというのが正直な感想でした。

ちょっとメディアとは関係の無い分野に話がそれてしまいましたけども、そういういろいろな選手がおります。本当にテニスという競技は、それこそ世界中どこに行っても試合ができるぐらいかなり人口の多い競技ですし、サッカーと同じようにもしかしたらそれ以上にいろんな国の選手が大きな大会にはやって来ます。当然文化の違いもあるわけですが、その他にも若手、それからベテラン、中堅どころとある程度年齢によってもグループができたりして、それから同じ文化圏でグループができたりして、そういった意味ではなかなか日本人が他のグループに入って行きづらい環境にあったことも事実です。

👁️ マスコミの仕事をするようになってみて

ベテラン選手と若手の違いということでお話をしたいんですけども、ベテラン選手になってきますと、これも日本の野球界のベテランと同じように自分が引退した後の生活を考えてるんですね。ちょっと嫌な言い方をすると、生活する為にベテランになってくると、選手でありながらマスコミの仕事を同時にこなしていく選手も出てきます。そうするとやはりそういったマスコミと関係を持っている選手に対して、ロッカールームの中でその選手に対する見方というのが全く二分されました。片方のグループは、逆にその人が例えばアメリカNBCだとか、そういうところで解説をしたりしているということで“その人達にうまく自分をアピールして、なるべく取り上げてもらおうというふうを利用していくタイプ”ですね。そういうタイプと“マスコミということをちょっと敬遠して、その選手を避けて行動してしまう人”と2つに別れました。どちらがいいのかというのはわからないんですけども、どうしてもそのぐらい選手の中でも、同じ選手でありながら少しでもマスコミと関わったというだけで、同じ選手だというふうに見てもらえないんですね。この人はマスコミの関係者だということで見られてしまう。それが私自身も同じように思っていましたので、実際引退してマスコミのお仕事をする時は、多少抵抗感がありました。私自身現役の時に、同じような例えばアメリカ人のパム・シュライバーだとか、ベテラン選手であ

んまり皆さんご存知ないかもしれないですけども、そういうベテランの選手がマスコミで仕事をしているということを知った時に、どちらの態度を取ったかという私は完璧に敬遠したんですね。もしかして話したらロッカールームの中で、私が何を食べてただとかそういうことまで言われてしまうんじゃないかと。全ての行動を見られてるんじゃないかと。どこまで話しているかわからない。そういう怖さがあったんですね。ですから彼女と話していて実際に悪い人ではないってわかっていながらも、なかなかマスコミと選手というので、水と油とまでいかなんでしょうけども、難しい部分があった。それは私は引退して特に感じることになりました。

引退してからマスコミのお仕事をしていくということになったんですけども、実際私引退するまで、今まで申し上げてきたような思いで選手時代やっていましたので、マスコミの中に入るということは全く考えてなかったんですね。どちらかと言うと「絶対にマスコミの仕事だけはしないぞ」というふうに思っていたほうが大きいです。ただ、じゃあどうしてNHKの解説でウィンブルドンに行かせて頂くようなことになったかといいますと、1つにはプロ選手とファンの垣根というのが日本はあまりにも大きいんですね。メジャーリーグの合宿とか春のキャンプとか見に行っても思ったんですけども、ファンと選手というのが一体なんですね。ファンがぐちゃぐちゃといっぱい歩いているところに選手は自転車に乗ってやって来たりとか、観客席と選手のベンチの間にフェンスなんて無いんですね。ところが日本に帰って同じように球場に行くと見ますと、こんな高いフェンスがあつてとてもじゃないですけど観客席の方から選手にサインをちょうだいとか、そうやって声を掛けられる雰囲気ではないわけです。それを見た時に、今の日本でなるべくテニスファンの方にテニスをもっとわかってもらったり、それから選手の生の気持ち、これを伝える方法が無いわけで、そういったことをわかって頂くためには、やはり選手の気持ちに近い間になるべく皆さんの前にお話をしたり、試合の解説をしながら、選手というのはこういう事実は考えているんですよというようなこととお話できればいいんじゃないかなというふうを感じ始めたからですね。

ただウィンブルドンに行ってみますと、実際にインタビュされる側だった人間からすると想像もつかな

いような、インタビューに際しての垣根がありました。私はテレビ局の方から選手にインタビューさせていただきとせば、その場でOKというぐらい簡単なものだと思ってたんですけども、実際は間に選手からテレビ局側の人間にあたるまでに3~4人の人を通してあります。テレビ局の、例えばNHKであればNHKの方がウィンブルドンという大会の広報にまずインタビュー申込書を出します。インタビュー申込書を受けたウィンブルドンの大会の方は今度は、WTAという女子テニス連盟の広報の方にそれを渡すわけですね。そのWTAの広報の方が今度そのインタビューがOKであれば、直接選手に行く場合もあるし更にエージェントに、例えばグラフだとかヒンギスだとかそういう大物になると、必ず選手に直接行かないんで、一度代理人・エージェントのところに行って、OKをもらわないと選手の耳まで行かないわけです。こういうシステムになっているということは全く知りませんでしたので、グラフにインタビューを申し込んでもなかなか返事が来ないわけですね。なんでこんなに来ないんだろうか、ひょっとしたらもうインタビューできないのかなと思っていた時に、たまたまロッカーの近くでグラフに会いましたので「実はインタビューの申し込みを出してるんだけどその話を聞いてる？」というふうに言いましたら、「エー、そんなのは全然聞いてないよ」と。一週間も前の話なんですね。一週間前の話を聞いてないというふうにボンと言われてしまいました。本当に1人の選手にインタビューすることの難しさというのは、今回のウィンブルドンでよくわかりましたし、これだけ難しければなるほどあそこまで記者の方があつかましくインタビューに来たり、電話をかけてきた気持ちも少しは理解できるようになりました。

📺 テレビ解説のむずかしさ

更に今度は解説をしていて、難しいなと思う面が沢山ありました。まずは最初解説をし始めた時というのは、全ての人に満足してもらいたいと、100人聞いておられれば100の方に良かったというふうに言って頂けるようにがんばろうということで、一所懸命喋っていたんですね。ところが例えばテニスをものすごくご存知な方がテニスの中継を見るのと、全く知らない方や「始めて見るわ」という方がテニスの中継見るのではえらい違いなんですね。テニスをご存知の方というのは私もそうなんですけど、テニスの中継を見てい

ても実況と解説がほとんどいららないんですね。要するにわかっていますので、ボールの音と選手の声だけで充分楽しいんです。その場にいれるような雰囲気になりますから。最近ラグビーが大好きで私よく見に行くんですけども、ラグビーの試合になるとルールはまだあまり知らないの、当然解説してほしいわけですね。1つ1つのプレーに1つ1つのポイントに今のは何だったというふうに言ってもらいたいわけです。ですけどももしテニスの中継を見ていて、私が1つ1つのプレーに今のはこうです。今のはこうですというお話をしていると、当然テニス好きの方やよく見ておられる方というのは「うるさい」という反応になるわけです。NHKのほうにもウィンブルドンの中継が終わって帰って来たら、非常に良かったと言ってくださるハガキもありましたけれども、中には「沢松喋り過ぎ」という方も当然いらっしやいました。喋り過ぎならまだわかるんですけども、「声が入らない」とか。これを言われた時は私はもうどうしようかと。声ばかりは変えるわけにはいかないので、それは困ったというしかないんですけども、とにかくすべての方に満足して頂くというのは基本的には無理だなというふうに、そういう事がわかるまでなかなか辛い思いをしました。今はどちらかという、スタンスとしてはテニスを始めて見た方よりは2~3回位は見たことはある、テニスは面白い、見てみようかなと思っているような方を相手にしているような気持ちでやっていますが、これも放送局によって、例えばNHKであればやっぱり玄人の方が見てる方が多いので、もう少し突っ込んだお話をしてみようとか、例えばTBSとか日本テレビで放送してる時は、放送局の方からも「本当に始めてテニスを見た人でもわかるように解説してください」というふうに言われますので、ある程度テニスの面白さという部分を表現してなるべく楽しく解説をしたいというふうに、ある程度スタンスを変えていますし、もっと突っ込んで今度はWOWOWとか衛星放送、ケーブルテレビとかになってきますと、本当にテニス好きしか見ないんですね。私もテニスTVというのに入っていますけども、これはやっぱりテニス好きな人じゃないとこのチャンネルには加入しないなと思うぐらいかなりオタクなチャンネルになっていますので、私自身も「あ、このチャンネルであればもっと本当に詳しく、あまり普段聞き慣れないような単語を出しても大丈夫だな」とかそういったことを考えながら、あ

る程度放送していかなければいけないというふうに思いました。選手の時と比べてえらい違いですね。こんなことに気を使いながら試合なんかしたことないですけど、やはり放送になると全く違ってくるということで、大変今年はいろいろな意味で勉強になりました。

● たくさんの手が加わって放送がなされている

更に放送に携わっておりますと、こんなに多くの方の手が加わって一つの番組が成り立っているのかということも改めて感ずることができました。ウィンブルドンの場合は、日本から派遣されて行ったスタッフが約20名ですね。それからヨーロッパの技術のスタッフの方が同じく2~30名いらっしゃいました。トータル4~50名なんですね。これでも少ない方だそうです。この方たちが何をしているかといいますと、一番びっくりしたのが音を作る方なんですね。テニスコートの端々に当然音を拾うマイクがあるわけですけども、例えばそれ以外にも審判台にマイクがあったり、それから観客席にもマイクがあるんですね。観客の拍手が入るように。こういったいろんな所に置いてあるマイクの音をどう調節するか。例えば観客席の音というのをもっと沢山入れるか。それとも選手が打っているボールの打球音、選手の呼吸の音、こういったものをもっと生かしていくか。どのバランスで放送していくかということも大きなテーマになっていました。衛星回線を使って日本に送られてきて、日本で放送されていますので衛星回線を使うことによって音が若干高くなるんですね。同じようにポンポンと打っている音でも、そのまま調節しないで日本で放送していると、違和感があるわけですね。多分見ておられても。「おかしいな、この選手の打ち方、打った時の音こんな音だったっけ」ということになりますので、そのへんはやはり調節をして現地できっと直して少し低音にしてから送り出しているということも聞きました。

よく選手が打ってエースを決めた後にすぐスローモーションが出ますが、あれもびっくりしたんですけども、決まった瞬間にテープを止めてガーッと巻き戻してポンと押せばスローモーションが出るらしいんですが、ちょっとでも狂っただけで全然関係の無いスローモーションが出たりとか、よくありますね。野球の放送でも「松井選手の前のホームランをご覧くださいませう」と言った時に、巻き戻すところを間違えて松井さんが空振りしたところが出たとか、そういうことも私

も見たこともあるんですけど、テニスの場合は決まったら次の瞬間にスローモーションを出さなきゃいけないということで、スローモーション係という方も当然いらっしゃいました。

その他に、選手の時には考えもつかなかったような、本当にたくさんの手が加わって一つの放送というのがなされているというふうに感じる事ができて、私は良かったというふうに思います。なぜなら、これを知らないで引退して、先程前半に随分辛口なことを言いましたけれども、ああいう思いでずっと来ていたら私は一生マスコミということに対して、メディアに対して若干考え違いをしたところもあると思います。やはり両方を経験してみないとどうしてあげたらいいのか、逆に選手はもっとこうしたら方が良かったんじゃないか、マスコミの側もこういう態度でいけば良かったんじゃないかということで、いろいろと考えることができました。

選手の時、自分の試合が放送されるのかっていうのが非常に気になりましたので、その日ウィンブルドンならウィンブルドンに行って、試合コートに入った時に、自分のテニスコートにテレビカメラが来てないと「エッ、放送ないの?」というように「放送してあげればいいのにな」という思いもあったわけです。当然これは他の選手もロッカールームの中で「今日は日本に電話したら私達の試合じゃなくて、グラフの試合やるらしいよ」とか、よくそういう話を耳にします。なんで日本人の試合を放送しないで、外人の選手の試合を出すんだらうかというふうに考えたこともあったんです。これは実際にNHK側としてみると、日本人選手の試合は放送したいんですね。だけでも、そのコートにテレビカメラが入れないコートというのがあったんですね。要するにセンターコートですとか、1番コート2番コートという大きなコートにしかテレビカメラが入れないということで、NHK側からも「なるべく日本人の試合を放送できるコートに入れてください」というふうに希望するわけですけども、気難しいウィンブルドンですから聞き入れてもらえないことがほとんどです。

そういった理由もありますし更には時差の関係、放送時間の問題で、ヨーロッパの試合であれば午後の少なくとも3時、4時ぐらいいまでに試合が終わってくれないと、日本では放送できないということですから、試合が遅い時間帯に組まれてしまった場合、どんなに

放送したくてもこれを放送することはできないんですね。日本で言うと朝の7時のNHKニュースにかぶってしまいますので、そのニュースをどけてまで放送することはできませんし、そういった事情もあるということも実際関わってみてわかりましたが、選手の時というのは皆そういう勝手な思いで「なんで放送してくれないんだ」ということを不満に思ってる選手も多分たくさんいると思います。私もそうでした。

● マスコミ=気持ちをファンに伝える伝達方法

このあたりのウィンブルドン中継、NHKのお話というのは、西田さんの方からこの後詳しくお話を皆さんお聞きになれると思います。私の方は選手としてということでこのへんで一度閉めさせて頂きたいなというふうに思うんです。今日いろいろとお話しようと思ったことをまとめて来たんですけども、実際お話していると難しいなと思ったのは、皆さんやっぱり何を聞きたいのかなと、メディアというお話になりますと私は“選手側から見たメディアのお話”というのを主に考えて来たんですけども、実際にこうして壇上に立ってみますとわかるんですね。話していると。「あ、なるほど。このお話には興味はないのかな」とか「あ、この話をしている時は皆さんの目がこっちを向いているな」とかなんとなく先生になった気分で、私も学生時代同じように下を向いたり、上を向いたりしてた時がありまして気分は非常によくわかりました。だいたい私が感じるころでは、メディアに対する考えよりも選手の実態、それからツアー生活、そういったことの方が関心あったのではないかなというふうに思います。当然、皆さんそうした選手のツアー生活だとか普段の私生活といったことには興味がおありだということとはわかるんですけども、選手に興味を持つのも多分きっかけとしては新聞であり、テレビであり、こういったメディアが先行している部分があると思います。今日こうして私は直接お目にかかっていますから、ある程度皆さんの中で沢松奈生子という人物がこういう人だということは、なんとなくわかって頂けたんじゃないかなと。直接お会いしていますからね。というふうに思うんですけども、やはりなかなかこれからもそうでしょうけども、トップ選手それからいろんなスポーツのオリンピックで活躍するような選手とかでも、お目にかかる機会というのは私もあまり無いので、実際新聞やテレビを見て「なるほど、こういうことを言っている

選手なのか」とか「頭いいなあ」とか「しっかりしてるなあ」とかそういうふうに思う時もありますし、「なんでこんなに怖いんだろうか」とか「もう少しやさしく答えればいいのにな」と思うこともあります。それは皆さんと同じように、ある程度マスコミの影響を受けてその選手を判断することがほとんどだと思います。経験上スポーツ新聞に書いてあることは1言えば10載ってるぐらいの大きなことが多かったですし、嘘は書いてないんですけども、かなり私自身も困ったことが沢山ありました。やはりテレビのインタビューになりますと選手が画面に映ってるわけですから、本当に言ったことになるわけですよ。それでさえも長いインタビューで答えているのに、ココとココをカットしてココとココを繋げてるとか、とにかく繋げるところをうまく繋げてしまえば「私はこの大会は1回戦勝てればいいなと思ってたんですけども、とにかくやっぱり伊達さんに勝っていい成績おさめたいですね」とか「いいテニスをしたいですね、勝てるようないいテニスをしたいですね」というように言ったとしても、うまく「私はこの大会には伊達さんに勝って」というところで終わってしまえば「なんてアグレッシブな子なんだろう」と。一応少しは引いて「勝てればいいな」ぐらいで言っている、映像の編集によってはうまくその選手を創ることができるんですね。そういったこともニュースだとか、そういったインタビューで皆さんよくご覧になるとは思いますけども、ちょっと視点を変えて「このインタビューはココを繋げてるんじゃないか」とか、映像が切り替わる場所がありますので、ちょっと目を凝らして見て頂ければ面白んじゃないかなと思います。

最後に、選手・マスコミどちらにとっても、いい関係というのは、近すぎず遠すぎずという関係であってほしいというふうに個人的に願っています。当然お互いいろいろな思いがあると思いますけれども、お互いに利用したりそれからされたりと。あまりドロドロしてしまうのは選手にとってももったいないことで、ただあくまでもマスコミの皆さんには選手がどうすれば気持ち良く競技に専念できるかということを考えながら、やはりその選手を使ってやろうとか利用しようということではなくて、その選手を応援しようというぐらいのスタンスで選手と関わって頂けるととてもいいんじゃないかなというふうに感じています。選手の方も、また嫌な事を聞かれるというようなことでマスコ

ミを敬遠するのではなくて《マスコミ＝自分の気持ちをファンに伝える伝達方法》と思って関わっていくことが望ましいんじゃないかなと思います。やはりこれからお互い歩み寄る為にも、私もそうなんですけど他にも多くのスポーツ選手経験者がおられますので、こういった元選手というのをうまく使って頂きたいなとい

うふうに思っていますし、選手の方にもなるべく後輩たちにはお話をし、うまくマスコミと付き合ってもっと多くのテニスファン、それからスポーツファンを増やしていければいいなというふうに感じております。

長々とあまりまとまりの無いお話でしたけれども、お付き合い頂きましてどうも有り難うございました。